都市計画　支部だより

中部支部

子どもによるまちづくりワークショップの可能性

本年 4 月 30 日、「こどもがつくるまち主催者サミット」（こどものまちサミット実行委員会・こどもがつくるまち研究会主催）が千葉県佐倉市で開催され、「ミニ・ミュンヘン」（1979 年－）のG．グリューナイズル氏と「キッザニア東京」（2006 年 10 月－）の住谷栄之資氏との対談を初め、日本全国の「こどもがつくるまち」の紹介と討論がなされた。そこには、札幌市「ミニミニさっぽろ」、仙台市「こどものまち」、佐倉市「ミニさくら」、市川市「ミニいちかわ」、武蔵野市「むさしのミニタウン」、多摩・百合が丘（川崎市）「ミニたまゆり」、横浜市「ミニヨコハマシティ」、大阪市「ミニ大阪」の他、中部地方から 3 件－名古屋市「ピンポン横丁」（こどもＮＰＯ主催、2003 年 12 月－）、名古屋市「だがねランド」（財団法人名古屋都市センター主催、2006 年 7 月－）、四日市市「こども四日市」（こども四日市プロジェクト主催、2004 年 11 月－）が参加したことは、注目してよかろう。

ここでは、本年 7 月 24 日－8 月 26 日に名古屋都市センター11 階まちづくり広場で開催され、延べ 2100 人の子どもが参加した「だがねランド 2007」（財団法人名古屋都市センター主催、名古屋市立大学芸術工学部鈴木研究室協力）を例にして、子どもによるまちづくりワークショップの可能性について探ってみることにしたい。

「だがねランド」は、名古屋弁でよく使われる接尾語「～だがね」から命名された子どもだけのまちで、そこへの参加者は、だがね役場で住民登録し、だがねランド町民証（住民票）を取得、また通貨ダガネを使用する。ワークショップは、「まちを作る」と「まちで遊ぶ」の 2 部から成る。「まちを作る」では、子どもたちはグループに分かれ、各グループでは、どのような商店にするのかを話し合った後、だがね役場から受け取った資金でダンボール、画用紙、紐などの資材を購入、それらを紙管と専用ジョイントで組み立てる直方体フレームに「フィル・イン」して商店を制作する。「まちで遊ぶ」では、商店主募集に応じて商店主となった子どもが、工夫した商品を販売し、商店主とならなかった子どもも工房で商品を作って問屋に卸したり、客として商品を購入したりする。更に、まちを作るアイデアを出し選出された子ども町長の公約や、「掲示板」に寄せられた「住民要望」を審議した子ども議会の決定に基づき、再度「まちを作る」ワークショップが開かれ、まちが拡張されていくのである。

都市の建設・維持管理の疑似体験を自然環境の保全まで拡大すると、名古屋市近隣だけを取って見ても、名古屋市千種区「文教地域の学習環境づくり」の一環としての「千の種あかし隊」（2002 年－）、長久手町「長久手田園バレー構想」の一環としての「平成子ども塾」（2006 年－）など枚挙に暇がないほどである。また都市における経済活動の疑似体験に関しては、前述した「キッザニア東京」の盛況ぶりが様々なメディアで取り上げられてい

る。「だがねランド」の特色は、これらまちづくりのハードウェアとソフトウェアの両方を子どもたちに疑似体験させるという点にあるが、ここでは、現実に見られるように、まちづくりのハードウェアとソフトウェアの担当者が異なり、両者が相反する事態が生ずる恐れがあるため、両者のフィードバックが用意されているのである。

子どもによるまちづくりワークショップは、子どもが他者に出会い、他者とコミュニケートして、ハードウェアであれソフトウェアであれ、まちづくりに対して何がしかの仕事を成就するという点で、子どもの教育としては重要な試みである。但し、その教育の効果は、大人がどこまでの仕組みを用意する／しないのか、どこまで運営をコントロールする／しないのかという程度にかかっており、実際、「キッザニア東京」では、スポンサー企業のお仕着せが余りにも強過ぎるとの批判も出されている。逆に、まちづくりという観点から見ると、子どもがまちづくりに対して関心をもってくれるだろう、また子どもの発想が実際のまちづくりについてのヒントを与えてくれるかもしれないという期待があるだけである。現時点では、その期待に性急な成果を求めず、子どもによるまちづくりワークショップの持続を見守っていく必要があろう。

（文責　名古屋大学　片木篤）

ワークショップの風景①

ワークショップの風景②